

びんごすがいなりしや  
備後須賀稻荷社

武里小学校の裏にある社を備後須賀稻荷という。「勝林寺稻荷縁起」によると、この稻荷社の本地仏は十一面観音である。しょうりんじ

建暦元年（一二二一年）、春日部城主春日部治部じぶの建立で関八州の三社稻荷の一つといわれている。

当時、この地方は海中の島であり、この島より海中を照らす怪光をみた獵師の訴えによって城主がこの地を訪ねると、枯木の朽ちた所に観音像があり、不思議に思つてこの観音像を城に持ち帰った。ある時、一人の旅僧が訪れてこの像を拝して「昔、弘法大師入唐の際、大唐の文殊菩薩より請給いしものを、帰朝後備後の国に安置した。その後、兵乱のため廻船に乗り関東に下つた御利益のある尊像である」とその由来をのべた。城主が霊像を拝しようとする何処かへ飛び去り、僧も姿を消してしまった。

その後、ある夜城主の枕上に老翁が立ち「我稻荷大明神なり、この島に社を建つべし」と、その時夢覚めて、この社を建立したという。この地を備後と称するようになったのも、「これ本尊が備後国より移り来た故事による」と記されている。

この稻荷社では毎年三月の初午の日に行なわれている行事が、いまも伝承されている。その方法は祭の前日を「ヨイミヤ」といつて夕方になると祭り当番の家に迎えておいた「ミコシ」を神社へかつぎ込み、安置して手打式を行なう。祭当日は、早朝に若衆が神社から「ミコシ」を祭り当番の家へ移し再び神社へかつぎ込む。さらに、夜更けてもう一度神社から「ミコシ」は祭り当番の家へ渡御たぎよして、その家へ一泊する（当番の家がお旅所となる）。

この祭りの形態は古い伝統的な形態である（約十年位前からは住民の生活様式も変わってきたのでこのお旅所は風習だけを残して、「ミコシ」は社務所に安置する方法に変更した）頭屋祭りの名残りを留めている興味深いものである。お旅所の儀が終わると、当番は酒、肴を用意して社務所を訪れ若衆の労をねぎらう。

この稲荷社は「子育て稲荷」と呼ばれている。祭り当日は里へ帰って来た嫁たちの参詣で賑う。特に子どもの夜泣きには霊験あらたかで、境内にある「ワラジ」小屋に納められた「ワラジ」を借りて子どもの枕元に置くと、夜泣きがなるといふ伝えがある。翌年には新しい「ワラジ」をお返しとして奉納する。

この「ワラジ」は三個で一組となっている。その理由は、この社が別名「ビッコ稲荷」といわれてご眷属の「キツネ」が三本足だからという。これは、ある時「キツネ」が犬に追われてモロコシ畑から「ショウガ畑」に入って逃げたが、その際キビの切株で足をケガをしてビッコになったという伝説からである。そのため稲荷神社の氏子は、今でも犬を飼わない。また、「モロコシ」やショウガを栽培しない慣習がある。

三社稲荷とは、王子稲荷、佐野稲荷とこの備後須賀稲荷をいう。

初出「広報かすかべ 昭和五十三年四月」かすかべの歴史余話